

魅せられて綴る藩文学（十五）

## 藩学「四教堂」と先哲

勝間田 三千夫

（会員 佐伯市中村北町）

### 第五節 京撰の旅

（一） 篠崎小竹と中島米華

大寶は、米華の外に海榮齋主人・古香外史と号した。

儒道を志す者は概して諸国を往来し、その国の文化を見聞することが必須の条件とされていた。

文政十二年春三月、米華二十九歳は自分の学問の仕上げには通らねばならない道があると、京撰を目指して出発した。かつて、芭蕉曰く「東海道を往来しない者は、俳諧ではない。」と、儒を志す者また然り、米華は九国にそして江戸に遊び、今京撰を学道最後の仕上げの道と信じ、限りない能力の深さを学問の深に求めて郷をあとにしたのである。五月、大坂に篠崎小竹を訪ねた。

小竹は豊後の人、天明三年（一七八一）に生まれ（此年四十九歳）幼にして読書を好み、九歳で竹崎三島の門に入った。三島にその偉才を認められてその養子となった。寛政の改革に及んで、十九歳の時養家を出て出府し、尾藤二洲の門に入った。後母の病篤きにより一時大帰したが、再び江戸に上り古賀精里の門に学ぶ。昌平龔に寓すること半年、朱子学者となつて養家に帰り三島塾を継いだ（近世日本の漢学者伝記者述集覽）京撰の間に遊んで、頼山陽に交遊を持たない者は儒者ではない。と言われる程、山陽の偉名は高かった。その山陽が京都に地盤をかためるのに二十年を要したという。父春水の子供を頼り、大阪には篠崎小竹、京都には小石元瑞を頼った。そして、京都で最初に弟子としたのが後藤松陰であった。後、この松陰を篠崎小竹の娘婿とした。山陽と小竹とは、親の代から子の代に到つて尚一層親交を温めていった。この京撰に山陽を除く以外は、小竹に比すべき大家なしと言われる間柄であった。

小竹を通して京撰と南豊とは密なる関係にあった。篠崎家は当時「鴻池」という渾名があつて、その學と富とは京撰学界に重きをなしたばかりか、鎮西文士をもその膝下に

摺服せしめたという。文士は自作の詩を世に問うためにも小竹の序文をその巻頭に掲ぐる事が肝要であった。

さて米華が是月五月、大坂に篠崎小竹を訪ねたことは文政十二年十月十五日、『日本詠史新樂府』稿本後の附書に見ることが出来る。

「今滋仲夏。余遊浪。訪小竹齋。

ことし陰曆五月、余(米華)浪速に遊んで小竹齋を訪う。また、『日本詠史新樂府』六十六首の著作は、この時に切つ掛を得た。前文に続いて

「机上ニ山陽翁著ス所ノ『日本詠史樂府』一冊有り。時

ニ坐ニ俗客有り卒讀ヨクセズ。京師ニ來ルニ及ンデ、癘疾びやく(今のマラリア)ニ患サレ、秋ヲスギ冬ニ至ル。

凡ソ三月ヲ閱エル。愁悶無聊、排解スベシコトナシ、若シ、因テ再ビ稿メヲ翁ニ借り而テ讀焉、再ビ之ヲ讀ダ後、病十分ノ三除クヲ覺ユ。特ニ陳琳瘡風ノフレアラズナリ。樂府詠史ハ明李西涯ノチ清尤西堂アリ。

明史樂府其他余未ダ多見アラズ。オイテ國乗ヲ詠スルニ至レハ則チ翁ヲ以テ嚆矢トナス。蓋シ翁ノ國乗ニ於テ識ハ人上ニ出ス眼紙背ニ透ル。故ニ其ノ發スルニシテ詩ヲ

ナス。率イテ皆落想天外ヨリ來ル。而テ自家ノ神力ヲ以テ之ヲ運ブ。此ノ六十六首ノ如キワ、每首題ヲ就シ意ヲシメシ、他語ヲマジエズ。而テ數千百年間、治亂興亡、是非得失、分説ヲ待ズ。隱隱出スオイテ楮墨ノ外ニ透ス。何等ノ自在、何等ノ警策、乃チ其手棘ズノ妙ヲ知ルナリ。余既ニ一本ヲ騰シ而テコレヲ蔵ス。又其ノ體ヲ倣ネ、詠六十六首ヲ連ル。以テソノ足ラザルモノヲ補フ。客ノ禪家機鋒ノ語ヲ借リテ余ヲ嘲ケルモノ有テ曰ク、再來半文錢ニアタラズ。余晒ツテ而謝テ曰フ、翁ノ錢銅ヲ山ニ取り、而テ之ノ鑄ス。余ノ若キワ則チ敗銅ヲ鑄ス、以テ錢トナスノミ。美惡固ヨリ辨ズルヲ待ズ然モ是レ亦錢ニ非スト謂ベカラズナリ。客答ヘズツイニ之翁ニ質ス

文政巳丑(十二年)孟冬(陰曆十月)望(十五日)。  
病中京師金坊ノ客ト寓シテ書ス。」(原漢文)



この時米華二十九歳、机上の山陽翁の『日本詠史楽府』稿本を示されたが、坐客があつて読み卒す。京都に上り頼山陽にお目見えし、瘡疾を患つて秋から冬にかけて凡そ三月も愁悶無聊、この病床にあつて賦した詩が「京寓病中作」である。瘡疾に臥して、薬鼎と熒々の中で切ない烏藤うとうの生活をすごすこと幾日か、山はすっかり晩秋を迎えていた。

京寓病中作

薬鼎熒々煙穗輕　烏藤幾日癡吟行

秋山知是多遊客　己聽街頭賣葦聲

この病中にもかかわらず、改勵して山陽のその稿本を借り、やがて其体に倣て六十六首を連詠したという。病と闘いの偉作を成したのである。

ではここで、山陽が定住の地として京都を安藤英男著『頼山陽伝』によって見ることにするが、この地に移つたのは文政五年であつた。

最も山陽の臨む地であつた京都はそれによると、小竹は生涯無二の善友であつたことから、小竹の紹介により小石元端（蘭医）の世話で、京都の一角に家塾真塾の看板をかかげることが出来た。定住の地を決めるまで六回も転居し、初めて自家を郷土東三本木に構えた。鴨川に臨んだ百

三十坪ばかりの宅地で、川越しに東山三十六峰や比叡山も眺められ、松風の音と千鳥の声がする静かな環境であつた。ここに間口十一間、奥行十三間の新居を造り水西荘と名付けた。

「此ノ山紫水明處ハ、セミノコ川ノ淺瀬ニ臨ミ蒲團被テ寐タル姿ナル三十六峯ノ紫緑ヲ望ミ、其西岸ニ机木」一條、二條中間ノ勝地ヲ占メタル、本ハ酒樓ナルニ、山陽西遊歸後其業大イニ行ハレ、文壇ニ虎視シ、飛鳥毛落ル此購ヒ得タル、所謂ル水西荘也。（略）

（隨筆百花苑）

文政十一年東南に別亭を設けて「山紫水明處」と名付け、これを書齋として筆硯に精勵し『日本外史』を完成させて、松平定信に進献を果たしたのである。

また十二月に入つて『日本楽府』と名付ける楽府体の詠史六十六首を一挙に脱稿している。この脱稿した『日本楽府』について、文政十二年六月二十五日に田能村竹田は「古来絶唱」の短評を敷衍ふいふえんして、後に「評語十二則」（楽府刊本附載）を作り、「六十六関は吾邦開闢ひら以來、この文字なかるべからずして、而も人の未だ倣なざりしものなり。」又「史才あるものは詩才なく、詩才あるものは史才なし。山陽は

奄有兼出す。故にこの六十六関あり。」と言っている。

その年の十月、山陽は潤筆の旅で美濃に遊んだ際、大垣の蘭医江島蘭齋を訪ねた。小石元端の紹介状があつたので大いに歓待され、日夜詩酒の小宴に臨んだ。時に蘭齋の二女を多保といひ妙齡二十七歳、多保は山陽を尊敬し、後に山陽の門人となつて細香という号をもらった。

大垣を去る時、舟をやとつて木曾川を下つた。この日は朝から大雪であつた。同地の後藤松陰が山陽の名を聞き、來つて入門の礼をとり、高橋の舟場に見送つてゐる。この松陰は後に山陽の門弟子となり、そして後、山陽の媒酌によつて篠崎小竹の娘婿となつた人である。(既述)

さてこの舟行きの途中、山陽は次の七絶を賦している。この詩は山陽の詩中でも、絶唱といふべきものであると言われているので紹介する

舟発大垣赴桑名

蘇水遙々入海流　蘇水遙々海に入つて流る

櫓聲雁語帶鄉愁　櫓聲雁語鄉愁を帶ぶ

獨在天涯年欲暮　獨り天涯にあつて年暮れんと欲す

一篷風雪下濃州　一篷の風雪濃州を下る

(二) 頼山陽と中島米華

米華が成長するとき佐伯の文学も成長する。

米華がこの京撰に遊ぶころ、夙にその名声は東海山陽道に流れていた。「豊後佐伯の儒臣中島米華、詩文に長じ江戸にの才名を留むと。」

さて、米華は何時京に上つたのか。「梅庵日記」によると、文政十二年七月十六日夕刻、山陽家を訪ねている。

この日の條に「肴三種出シ、櫻園・大堀正輔・増太・秋蘭ト共ニ同席シ、大文字火ヲ見物、大イニ賜ハツタ。」と米華を歓迎している。山陽と米華は、文政元年以來十一年ぶりの再会であつた。

中島米華、遊学の第一歩の飛躍を江戸昌平覺に、そして今第二の飛躍を果たさんと、京都に遊んだのである。

因みに山陽は風流を好む人で、夕刻鴨川の水際に未だ明るさの残る申ノ刻(午後四時頃)、山々は薄紫に染まる昏れ時を、山紫水明の刻といつて、最も愛した時刻としていた。この時刻から酒を飲み始めることを好み、客を招くにもこの時刻に到着するように屢々指定している。

七月二十四日、この頃山陽は文政元年西遊中の作「西遊稿」開版の心組をねつていた。殊に博多帯についてである。

山陽は琵琶を奏するのが好きだった。書齋山紫水明処にあつて、琵琶を抱えて柱に背をもたせかけ、平曲の一節を愛弟子細香に聞かせようと手にすると、先刻まで居た中島米華・塩谷岩陰・岡田鳴里らと他の門人達も一人引き二人引き去つて、小さな書齋の中には細香の他には誰もいない。同じ屋根の下に暮らす時の流れの中に、細香はひそかに山陽を慕うようになった。また、山陽も曲の中に、ほれほれとして溺れていく気持ちを抑えられなかった。しかし、山陽は既に小石元端の養女梨影を妻にしていたので、細香は悔いても及ぶものではなかつたのである。

八月八日、仙台藩儒者大槻磐溪が山陽を訪ねている。

仙台藩六十二萬石の藩校養賢堂の教学に、頼山陽の『催雨記』が論じられている。大槻磐溪これを門弟に論ずるとき、嘗て文政十二年八月八日に西遊して、頼山陽を訪ねた時の事を語っている。この論を細かに聞いた門弟の一人に岡鹿門がいた。その岡鹿門が後に『在臆話記』を著した中に、磐溪に聞いた当時の様子を書いている。それによると話は次のようである。

〔磐翁（磐溪）ノ話ニ、余西遊ノ時、野田笛浦ガ唐人ヲ送り長崎ヨリ歸途、山陽ヲ見タルニ、其話ニ「笛浦、

山陽二問フ、中島増太、淡窓門聖堂ニ遊ビ、一時ヲ壓倒セシ才子ナルニ、先生ニ調シタル時、先生一言ノ挨拶ナシハ何故ゾ」ト、山陽曰ク、「此ノ書生、天下ノ才子ト云フ事ヲ鼻先ニブラサゲ、此ノ山陽ニ見ヲ求メタリ。此レ余ノ答ヘザルハ即孟子ノ滕公ニ答ヘザル同一也。子若シ山陽ヲ見ルナラ、才子風ヲ為スベカラズ」ト。（以下略）

（森銑三著「隨筆百花苑」）  
磐溪が訪うた時、山陽家は俗客で満員だった。山陽は俗客を断わり、磐溪を書齋山紫水明処に案内して酒肴を具し優待した。その時の山陽の話がこれであり、磐溪はこの事を著『西遊記』に認めている。

また、野田笛浦が山陽に問うた下りについては、米華が山陽を訪ねた七月十六日夕刻には既に在て時を同じくし、米華の挨拶を聞き後に問うたものと思われるが、それにしても米華は如何なる挨拶をしたものかとみるべきか、嘗て淡窓に、山陽と米華を比べて才能は両者同じく、人物は米華が勝ると言われているように温厚な人であり、また山陽の才識に傾倒して多年の夢が叶っただけに、礼節を弁えない筈はない。傲慢な山陽には性格の相異るところであり、

山陽らしい応対ぶりであったと思われる。

因みに、この年大槻磐溪二十七歳、中島米華と同歳、野田笛浦三十歳。今両者を紹介すると、

大槻磐溪 おおつきはんけい 享保元年五月十五日江戸に生まる。十六

歳で昌平饗に入門松崎謙堂に学ぶ。文政十一年七月蘭学修行の爲長崎に赴く。しかしシーボルト事件が起こり一旦東帰、翌十二年八月八日西遊して頼山陽を訪う。天保三年仙台藩の儒臣に挙げられ、以来儒学に専念し文章家として名を為す。文久二年仙台に移り、藩校養賢堂の學頭となった。

(国史事典・頼山陽全書)

野田笛浦 寛政十一年に生まる。丹後國田辺藩士儒者

江戸に出て古賀精里せいりに入門、苦学、後藩より学資を給せられる。文政九年清国船得泰号清水港しみずに漂着の際、古賀侗庵どうあんに推薦され、清国人と筆談交換し名を挙げた。後拔擢されて執政となり藩政に携わる。(日本歴史大辞典)

文政十二年十月十五日、中島米華著『日本詠史新樂府』の下書きができた。この書は頼山陽の『日本樂府』に倣して

著したものである。(既述)

山陽はまた、李西涯の擬古樂府に倣して国史に題材をとって、日本の國数で国史のヤマを六十六に取り、我が國の治乱或いは名教の是非を、詠史によって表現したもので、いわば詩を並べて国史を綴ろうとしたのである。これを真似して同じような試みをしたのが中島米華の『日本新樂府』である。樂府とは、古体詩の変形で平仄ひょうそくや押韻にとらわれず長短句を自由に交えて、樂器に合わせて歌うように設計されているものである。(安藤英男著「頼山陽伝」中島米華はその著書『日本詠史新樂府』の跋あとがきに「又」と附識して言っている。

翁、未ダ六十六首ヲ作ザリシ前。既に「□芋」焼肉」ノ二短歌アリ。唐、宋ノ事ヲ詠ズ。李西涯擬古樂府ヲ見ルニ及ンデ、其體ヲ用イテ本邦ノ事ヲ詠ズ。余(米華)亦、未ダ六十六首ヲ作ザリシ前「咬炒豆」「兒素餐」ノ二短歌アリ。二大儒ヲ詠ズ。翁樂府ヲ見ルニ及ンデ、再ビ其體ヲ倣シテ本邦ノ事ヲ詠ジタ。事相類スト謂ウ可シナリ。翁ノ作ハ六十六首ヲ限リテ、以テ吾ガ州數ニ應セリ。今コノ篇、前二作ル所ノ二短歌ヲ附スルハ、六十六州ノ外、更ニ二島アルノ意ナリ。

大寶再識

翁（山陽）の二短歌は文政五年の作であり、米華の二短歌は文政七年の作である。なお翁（山陽）の二短歌は六十首の内在り、米華の二短歌は六十六首の外にある。よつて翁はその外に二島（老岐・對馬）がある。共に六十六首の外に二短歌があつて同じである。

米華はこの『日本詠史新樂府』六十六首を、京師に客寓して、病中にあつて凡そ三ヶ月をかけて稿本を作した。

頼山陽は廿日強で『日本樂府』六十六首を作したといつてゐる。

安藤英男著『頼山陽伝』によると、老中松平定信に進献した『日本政記』の著述に邁進する間、政記の論文と表裏をなすものを、樂府体の詩で遺しておこうとした。『日本政記』が完成をみるには長い年月を要しただけに、この樂府は多年の苦心の結晶である。

文政十一年十二月二十五日付、美濃の江馬細香に宛てた書簡によれば、その書中に「僕此冬ノ業・冬ト云ヘドモ臈月以來也。廿日強・日本樂府六十六関、明・李西涯之擬古ヨリ存付候テ仕候。……略」とあり、二十日間で完成したと云つてゐる。

また、篠崎小竹は米華の『日本詠史新樂府』を次のように批語してゐる。

「子玉ハ未ダ酔ズ、マメヤカナ鄙人ひなびとノ如シ、ソノマメヤカサハ既ニ號呶起舞人顔ヲシカメシム、此ノ藁出ズルニ及ンデ、觀ル者始メソノ奇才ナルニ驚キ何ゾ識ラズ、若シ書ヲ讀ミ暇ニ詩ヲ作スナリ。一夕諸ヲ子玉ニ質シテスナハチ笑ツテ曰ク、僕第夜多ク寐ラズ、酒スナワチ近來癖ナリ。請メテ今ヨリ限リタツト余コレニ於テ能ク詩ヲ作シ、能ク書ヲ讀ミ以テ其ノ所ヲ知ル。而レドモ酒ノ限リ之ヲタチ果スカ、後來讀ム所作ス所量ヲ限ルベクニアラズ。信ニオンレルベキ哉、往時履軒先生余ノ爲ニ云ウ、才子畏レル足ラズ。才翁實ニ畏レルベシ、子玉尚社以テココニ告ゲザルベンラズ。才翁實ニ畏レルベシ、子玉尚社以テレルベシ。子玉尚社以テココニ告ゲザルベカラズ。（原漢文）

言語風采も田舎人らしく、素朴で有つたことが知らされる。学問の該博であつたこと、詞藻の卓絶豊富であつたことは今さらいうまでもない。

小竹のこの批語は『庚寅臘月』に識したもので、文政十三年か、天保元年か、改元は十二月十日である。

かくして米華は、山陽の『日本楽府』にその体を倣して『日本詠史楽府』を作したのであって、題目・内容とも一つとして山陽の原作に重複することなく、一気に連詠したその詩才に驚かざるを得ない。

では、この稿本が明治二年に至り、京都の三書房（尚書堂・文求堂・文石堂）の手で官許新稿されている。

十月十九日笠山と山陽の母、飯田氏、名は静、梅麴と号す。頗る賢夫人にて文学に長じ、特にその日記は有名である父春水は、安芸藩主淺野侯に仕え多くが江戸詰であった。

天保元年（文政十三年）閏三月六日、古賀穀堂の子若臯が父に随い帰藩の途中一足先に山陽を訪ね、明日父の来訪を告げた。翌七日古賀穀堂来訪し、文政元年九州遊歴中長崎に船遊以来十三年ぶりの再会をした。この古賀穀堂は、父精里から山陽との交わりを厳禁されていたにも拘わらず親交を続けている。穀堂は山陽に惚れ抜いていたからである。米華が山陽門に在つて穀堂に書簡を送った。その返書の中に『関西唯一頼子成アリ、試ニ文才ヲ論ズレバ、即チ余子ハ終ニ應ニ一籌ノ遜スベキ耳。』と山陽を絶賛していることから、親交の深さを察することができる。

そして九日、この水西荘に細香の帰郷を饒別した。十三

日に至つて山陽は結婚したい愛弟子の告白に、中島米華・岡田鴨里・塩谷岩陰を伴つて湖南に見送った。一行が北白川を過ぎるころ、伊勢国の長谷川という人から名物の生鮓が届けられた。つつみには一通の走り書きの手紙が添えられていた。（それは妻梨影の心遣いであった。）

それを包み直して瓢の酒を添え、味の落ちぬうちにと、四人はさつそく瓢の酒を汲み交わし、一切れずつ分けてほよいなれ加減の鮓を味わいながら、一点の落度のない梨影の気持ちをかみしめるのである。

それから比叡に連なる尾根田ノ谷峠を越え、志賀の里に下り、道中詩を吟じたり、小休憩したりしながら琵琶湖の南岸、辛崎の松についたのは午后も大分すぎた頃であった。湖上に漂う一面の春霞、頭をめぐらせば比良の峰々が連なり、広い湖上に幾つかの舟影がみえる。そして夕暮れ近く湖水のほとりに別れ、山陽と門人三人は舟で大津へと向かった。湖上を流れる春風をうけて、山陽と門人たちの舟は次第に遠ざかつて行く。辛崎の松の下に去り得ずにいた。この時細香は「唐崎松下拜別山陽先生」と送別の詩を賦した。山陽と細香という師と弟子との情熱的な恋が詩中に漲っている。



唐崎松下拜別山陽先生

儂立岸上先生船 船岸相望別愁牽

人影漸入湖烟小 罵殺帆腹飽風使

躊躇松下不去得 萬頃碧波空渺然

別恨極時幾度誦 途上賦賜送別篇

これは細香の初稿である。その末句に対し「結末是れ實事なりと雖も、や、振はざるを覺ゆ、その無情の語なるを以て爾り。當に廿年來相逢ひ相別る。未だこの別れの別れ難きにといふ意を言ふべし。」と注し、「二十年来七度別、未有如此別恨纏。」と細香は改作している。

師弟の間にして二十年来相逢い相別ることはあつたが、何故にこの日に限つて離別を悲しんだのか、図らずも師弟最後の永訣となつた。門弟の頃、妻ある師と知りながら悔いても及ぶものではないと、以来門弟として美しく交際していこうと心に誓つた細香であつたが、かつてなかつた自分でもわからない心の痛みを感じていた。

春の琵琶湖は限りなくもえてやまなかつた。湖底の深さは幾千尺あろうとも計ることは出来るが、計るに計れぬ恋の深さは辛崎松下を越えてはならぬ恋峠としたか、細香はついに一生を独身で終わっている。

山陽は十五日に至つて、伊勢・長谷川某へ手紙を送つてゐる。

「先頃(十三日)は、御國産二品・・・別て鮓は妙品・折節・湖上へ遊出かけ候處へ相達、辛崎古松下にて、美濃(細香)・豊後(米華)・淡路(鴨里)之三客と各一切ずつにて一杯仕候。攝州之酒を、勢州の魚にて、(安藝の自身を併せて)四箇國のもの一醉、江州の風景を賞候、太平世界、難有事に候。」と風情の美味を添えた礼状であつた。

この見送りに米華・鴨里・宕陰を伴つたことは、山陽がこの直弟子の中でも直弟子ならぬ客弟子として、珠に将来儒人として嘱望する意図のもと特に推重していたと思はれる。

岡田鴨里はこの時(天保元年)二十五歳であつた。

文化三年淡路(兵庫県)の人、字は周輔、号は鴨里、本名は砂川氏、岡田氏を嗣いだ。頼山陽に学び、山陽に死の一年前(天保二年)日本外史の不備を補うことを依頼され、十九年の年月を経て日本外史補十四巻を公にした。文久二年洲本学問所教授となつた。明治十三年九月五日没す七十五歳(漢学者伝記及著述集覽)

塩屋若陰はこの時（天保元年）二十二歳であつた。

文化六年四月十七日江戸愛宕山麓に生まれ、四歳で父桃蹊に孝経を授けられ朗誦したという。文政二年十一歳、能く手から仲庸を写し且つ韻記した。文政七年十六歳で昌平饗に学び、書生寮に入り書堂記を作して、その志を述べた。同九年十八歳の時同学の安井仲平・佐田修平等の戦国策尚書を会講し、書経存疑一卷を作す。同十一年五月松崎謙堂の門に入る。天保元年三月京師に再遊し、頼山陽の塾に寓す。山陽・若陰と外史を対校し、時には樓上に置酒して英雄の事蹟を縦談したという。（漢学者伝記及著述集覧。日本漢詩史）

後、浜松候水野忠邦に仕え俸十五口を給す。水野氏が内閣を組織するに及んで、その帷幕に参じた有能な官吏となつた。また後に、親友の安井息軒・芳野金陵と共に鼎立して、昌平饗の学政を執る官学教授となつた。（文久年間に至つて昌平饗はこの若陰・息軒・金陵の三家を教授に迎えるに及び、寛政三博士の盛時に復した。）慶應三年八月二十八日歿。五十九歳

（中村真一郎著、頼山陽とその時代）

若陰が山陽塾に学んだのは、若い頃から史学に専念する

決意を固め、一生の仕事に徳川時代の通史を書くことを選んで来た。それ故、国史と文章とを学ぶ爲だつたという。また岡田鴨里は、この細香女史送別の状況を送詩巻の跋に、次のような興味ある諸事実を伝えている。

「昔、京師ニ遊ビ、山陽先生ノ門ニ居ル。岡田周輔（鴨里）淡州ヨリ至リ、朝夕藝文ヲ以テ相ヒ追隨スルヲ得タリ。一日、周輔及ビ南豊ノ中島子玉（米華）ト先生ニ從ヒ、細香女史ヲ送ル。白川二道シ、志賀ヲ越エ、細香ト唐崎ノ松下ニ別ル。一葦、大津ニ航シ湖山ヲ縦觀シ、英雄ノ陳跡ヲ弔セリ。回憶倏忽二十年、先生、既に館ヲ捐<sup>サテ</sup>テ、子玉、亦タ早ク亡ス。而シテ周輔、外史ヲ増補シ、以テ遺託ヲ終フ。予則チ礫<sup>れき</sup>碌、成ス所ナシ。今、諸子ノ周輔ヲ送ル詩ヲ讀ミ、今昔ヲ俯仰シ、慨然タル者、之ヲ久シウス。知ラズ。周輔、尚先生ノ白川山上ノ語ヲ記スルヤ否ヤ。言フ所、織豊諸英雄ノ登覽ノ想、必ズヤ吾輩ノ山ヲ品シ水ヲ評スルノ情ト異ナルガワカラント。周輔ト雖モ、豈ニ感慨ナカラシヤ。書シテ以テ之ヲ問フ。」

弘化丁未（四年）仲春朔（陰曆三月一日。）

（跋送岡田周輔詩卷・東京・佐伯篁溪氏寫贈）